

出会

No. **67** 2013. 3. 21

キリスト教教育委員会



初めて行われた酪農学園大学クリスマス・コンサート

2012年12月18日(火)、牧野時夫さんの指揮のもと、室内楽団、吹奏楽団、聖歌隊、教職員が参加してイエス・キリストの誕生を讃美した。

「忘れない」から「覚えている」へ

循環農学類・キリスト教NGO論研究室 高橋 一

震災を忘れない——仙台ボランティア・キャンプに参加して

獣医学科4年 宮木乃里子

大学礼拝、あんなこと、こんなこと——大学礼拝出席カード感想より

食と健康学類・科学英語研究室 白石 治恵

「忘れない」から「覚えている」へ

キリスト教NGO論研究室 高橋 一

みなさんが大学生だったとき、日本は東日本大震災を経験しました。2011年3月11日は、みなさんにとっても生涯にわたって心に刻まれる日になるでしょう。

日本は300年続いた江戸幕府の時代から、1868年に明治維新を迎えました。それから77年をへて、1945年8月、アジア太平洋戦争（第二次世界大戦）の敗戦に出会います。さらに66年をへて、2011年3月に東日本大震災と福島第一原子力発電所事故に直面することになりました。60年から70年たつと、日本はそのつど、歴史を変えるような出来事に会おうかのように思われます。

「3.11」後のあなたへ

1995年1月の阪神淡路大震災のときから、「震災」を見つめてきた一人のジャーナリストの書物から、いくつかの言葉を引用します。

「どれほど大きな戦争や災害でも、時間がたつにつれ、当事者以外の記憶はおぼろになり、薄れていきます。かけがえのない家族や友人を失っても、いつも、いつまでも記憶を刻みつけている人々と、直接体験しなかった人の記憶には、しだいにギャップが生まれ、被災した人々は孤立感を深めていきます」。

「2011年3月11日に起きた東日本大震災は、ある意味で、この国に住むすべての人が同時に体験した災害でした。しかし、そんな大災害であっても、「今」を生きることに懸命な日々がか

さなると、つい意識から遠ざかり、「なかったこと」にしてしまうようになりがちです。失われた命、失われた故郷を思う人々と共に生きるには、忘れないこと、いつまでも記憶し続けることが何よりも大切だと思うのです。

「そしてそのことが、次の大災害で、あなたの身近にいる人の命を、ひとりでも多く、救うことにもつながるのだと思います」。

気仙沼では、津波で家押し流された人から、こんな呻くような声を聞いた。

「俺たちが、何もかも失ったことを、みんな忘れたんじゃないか。俺たちだって、福島の人たちを見て、遠慮してものを言わなかった。彼らだって、あんなひどい目にあっているんだから。でも、それで俺たちが忘れられるなんてことがあって、いいんだろうか」。

これらの言葉は、外岡秀俊さんが書かれた『3.11 複合被災』（岩波新書、2012年）に記されていた文章です。

「一日に100万円送ってくれるよりも、毎月一万円を100ヶ月送ってほしい」。そんな被災者の言葉を聞いたことも思い出します。

デューラー「祈りの手」

みなさんの卒業に向けてお贈りする「出会い」に掲げた「祈りの手」と題する版画は、ドイツのルネサンス期の画家アルブレヒト・デューラー（Albrecht Dürer, 1471～1528年）が作ったものです。この版画にはあるエピソードが伝えられています。その作



品にまるわるお話しをお伝えして、私からの最後のメッセージにします。

今から500年ほど前、ドイツのニュールンベルグの町に、デューラーとハンスという親しい若者がいました。

2人とも子だくさんの貧しい家に生まれたのですが、共に幼い頃から画家になりたいという夢を持っていました。

2人は版画を彫る親方の元で見習いとして働いていました。しかし毎日忙しいだけで、絵の勉強ができません。

思い切ってそこをやめて、絵の勉強に専念したいと思い立ちます。でも、絵の具やキャンパスを買うお金もままならないほど貧しく、働かずに勉強できるほどの余裕はありませんでした。

ある時、ハンスがデューラーに提案しました。

「このままでは2人とも画家になる夢を捨ててくなくてははいけない。でも、僕にいい考えがある。2人が一緒に絵の

勉強はできないので、1人ずつ交代で勉強しよう。1人が働いてもう1人のためにお金を稼いで助けるんだ。そして1人の勉強が終わったら、今度は別の1人が勉強できるから、もう1人は働いてそれを助けるんだよ」。

どちらが先に勉強するのか、2人は譲り合いました。

「アルブレヒト、君が先に勉強してほしい。君の方が僕より絵がうまいから、きっと早く勉強が済むと思う」。

ハンスの言葉に感謝してデューラーは、イタリアのベネチアへ絵の勉強に行きました。

ハンスはお金がたくさん稼げる鍛冶屋に勤めることになりました。

デューラーは、「1日でも早く勉強を終えてハンスと代わりたい」と、ハンスのことを思い寝る時間も惜しんで絵の勉強をしました。

一方残ったハンスは、デューラーのために早朝から深夜まで町の鍛冶屋で、重いハンマーを振り上げ、いっしょうけんめい働いて、デューラーにお金を送り続けました。

1年、2年と年月は過ぎていきましたが、デューラーの勉強は終わりません。

勉強すればするほど深く勉強したくなるからです。

ハンスは、「自分がよいと思うまでしっかり勉強するように」との手紙を書き、デューラーにお金を送り続けました。

数年後ようやくデューラーは、イタリアでも高い評判を受けるようになったので、故郷に戻ることにしました。

「よし今度はハンスの番だ」と、急いでデューラーは故郷のニュールンベルクの町へ帰りました。

2人は手を取り合って再会を喜びました。

ところがデューラーはハンスの手を

握りしめたまま、呆然としました。

そして、泣きました。

なんとハンスの両手は、長い間の鍛冶屋での力仕事でごつごつになり、もはや繊細な絵筆が持てない手になっちゃってしまっていたのでした。

「僕のためにこんな手になってしまっただけ」と言っただけで、デューラーはただ頭を垂れるばかりでした。

自分の成功が友人の犠牲の上に成り立っていた。

彼の夢を奪い、僕の夢が叶った。

その罪悪感に襲われる日々を過ごしていたデューラーは、

「何か僕にできることはないだろうか」、「少しでも彼に償いをしたい」という気持ちになり、もう一度、ハンスの家を訪ねました。

ドアを小さくノックしましたが、応答はありません。でも、確かに人がいる気配がします。

小さな声も部屋の中から聞こえてきます。

デューラーは恐る恐るドアを開け、部屋に入りました。

するとハンスが静かに祈りを捧げている姿が目に入りました。

ハンスは歪んでしまった手を合わせ、一心に祈っていたのです。

「アルブレヒトは私のことで傷つき、苦しんでいます。自分を責めています。神様、どうか彼がこれ以上苦しむことがありませんように。」

そして、私が果たせなかった夢も、彼が叶えてくれますように。

あなたのお守りと祝福が、いつも彼と共にありますように。」

デューラーはその言葉を聞いて心打たれました。

デューラーの成功を妬み恨んでいるに違いないと思っていたハンスが、妬み恨むどころか、自分のことより、デューラーのことを一生懸命祈ってくれ

ていたのです。おそらくデューラーがイタリアで絵の勉強を続けている間も、ハンスはデューラーのことを片時も忘れることなく、覚えて祈っていたに違いありません。

ハンスの祈りを静かに聞いていたデューラーは、祈りが終わった後、ハンスに懇願しました。

「お願いだ。君の手を描かせてくれ。君のこの手で僕は生かされたんだ。君のこの手の祈りで僕は生かされているんだ！」

こうして、1508年、友情と感謝の心がこもった傑作「祈りの手」が生まれたのです。この版画は、今はオーストリアのウィーン的美術館に収められています。

remember という言葉

「忘れない」ことは、「覚え続けること」です。

英語で「覚えている」は、remember です。語源的には正しくないかもしれませんが、よく見てみるとこの言葉は、re-member とも読めます。「再び (re) メンバー (member=仲間) になる」という意味ですね。

今日からみなさんは大学時代を共に過ごした仲間と別れ、それぞれの道を歩みます。でも、仲間の困難やつらさを忘れない人でいてほしいと私は思います。

それは「3.11」を経験した人たちにもあてはまります。

いつの日にか、「再び仲間になる」日まで、忘れないで、覚え続ける人であってください。

私も今日をもって、酪農学園大学を離れます。が、みなさんや「3.11」の人たちを忘れないで、覚え続けて生きていきたいと思っています。(了)

震災を忘れない

—仙台ボランティアキャンプに参加して—

獣医学科4年 宮木乃里子

私は、2012年の夏、キリスト教教育委員会が主催する、震災支援の「仙台ボランティア・ワークキャンプ」に、学生9名、教員1名と共に参加しました。私が参加した理由は、誰かのために何かをしたいという思いと、自分が持つ震災に対する不安を、知らない、わからないと誤魔化さないで、現地に行って、少しでも作業をしながら考えようと思ったからです。



台湾長老教会のみなさんと(青いTシャツが筆者)

今回お世話になったのは、仙台にある東北地区被災者支援センター・エマオです。ボランティアの作業はワークと呼ばれ、地域の人々と交流しながら進めるスロークワークが大切にされていました。

ワークには、畑の整地や作付け、家

の掃除、仮設住宅でのラジオ体操参加など色々ありましたが、私が参加したワークは主に二つでした。

前半に行ったワークは、畑のがれき拾いでした。がれきは畑の表面に落ちているだけでなく、埋まっているものも多く、一列に並びスコップで掘り返しながら、少しずつ拾って行きました。毎日何袋もの土嚢袋が一杯になり、木の枝の山ができました。

後半は、家の跡地の草取りです。その跡地は雑草に覆われて、がらんと何もありませんでした。まるで小さい頃近所にあった売り地のような感じで、本当に家があったのかと思えるほど平らでした。でも草取りをしていくと、小さながれきがたくさん落ちていました。草取りと同時に拾っていくと、最初は何もないように見えた跡地に、小さながれきの山ができあがりました。

畑も跡地も、がれきと一言で言っても、様々なものがありました。太い木の枝や根、松ぼっくり、ビニールやプラスチック、割れたCDや本、陶磁器・ガラス・タイル・鏡の破片、家電の一部、

木材や瓦の欠片などがありました。最初、木の枝や石、瓦を連想していた私にとって、その種類の多さは驚きでした。これでは土地が使えない、と思うのと同時に、ここに埋まっているのは誰かの生活の一部だったものだ、ここは誰かが住んでいた場所だと実感しました。津波が壊していったのは日常だったことを、目の当たりにしました。

また、一年以上経っているにも関わらず、がれきは残っており、手作業でしか拾えないものも多く、元通りにするにはまだまだ時間がかかるだろうと思いました。けれど同時に、きっと大丈夫だとも思えました。がれき拾いをした畑の隣に、つい前日まで同様にがれき拾いをしていた畑があったのですが、私たちが作業をする横で、整地され、作物が新たに植えられていました。先は長いかもしれないけれど、少しずつ取り戻していることを、実際に見ることができました。

現地に行ったことで、ワーク以外から感じられたことも多くあります。一番心に残っているのは、風が吹いていたことです。屋外での作業はとても暑かったですが、いつも心地よい風が吹いていました。私は、海に近いので、海風が吹くのは当然と思っていましたが、休憩で地域の方とお茶をしているとき、「前はこんなに風、吹かなかっ

たんだよ」と言われました。前は防風林と多くの家があったため、そのお宅まで風は来なかったそうです。それは、そこでずっと生活してきて、その場で話していたからこそ出てくる言葉だと思います。

私がボランティアに参加して、どれだけ復興に役立てたかを考えると、それはほんの少しなのだろうと思います。けれど、実際に現地に行ったことで、自分の感覚を持って震災について考え、震災をニュースという情報としてではなく、そこに人々が生活している現実としてイメージできるようになりました。それは「震災を忘れない」という一番大事な思いの支えにできていると思っています。

自分で感じたことを、自分が考えたことを、これからどう活かしていくか、どうやって被災地に届けていくか。それを忘れず、少しずつ考え、実行していこうと思っています。



畑のゴミ拾い

大学礼拝、あんなこと、こんなこと

—大学礼拝出席カード感想より—

食と健康学類 科学英語研究室 白石 治恵

卒業生の皆さんは、この時期それぞれ、4年間あるいは6年間の大学生活を振り返っていることと思います。キリスト教主義を基本としている酪農学園大学では、学生の皆さんに毎週行われる礼拝への出席を奨励してきました。その礼拝で学生の皆さんがどのようなことを思い、また学んだのか、2012年度の出席カード裏の感想から垣間見てみましょう。

<「春の教育強調週間」(ウィットマー 宣教師)>



- ・「だから命を選びなさい」「生きることは受け身になることではない」「命は一生懸命生きている」など、心に響く言葉がたくさんあった。こういう思いを忘れずに生きたい。
- ・毎日、当たり前のように食物を食べているが、その一つ一つが命であり、その命をいただいて自分が生きていられることに気付いた。感謝の気持ちを忘れずに生きていきたい。
- ・神は人間に、選ぶことを与えてくれた。そして、生きるということは、足を汚す=何かをやる、何かに挑戦するということ。今までは、そんな考えを持ったことがなかった。しかし、今日の礼拝を通して、新たに「生きる」「命」に対して、しっかりと考えを持つことができました。

- ・今日の大学礼拝に出て、自分をもっと好きにならなければならないと思いました。どうして私は生きているのか？何に向かって生きていくのか？よく考えたいと思います。

<「共に生きよう」をテーマとした礼拝>

- ・人は、結局は一人(独り)。しかし、必ず誰かがそばに居て、「共に」いることに気づきます。それに気づくことで「愛」や「尊敬」「感謝」ができる。それって幸せなんだと思いました。今、悲しみに暮れている人が少しでも幸せになることを祈ります。

<ゴスペル・コンサート>

- ・この音楽の迫力は本当にすごかった。一回聴いただけでここまで感動するような音楽に出会ったのは、はじめてだった。
- ・Know Gospelのみなさんの歌声と一緒にになった。あんなに大きな声で、全身で歌ったのは初めてな気がする。心が軽くなって新しい自分に生まれ変わったように感じた。



<「涙よ、歌となれ」と題して北光教会の牧師先生が語ってくださった礼拝>

- ・生きる意味について。自分の目標に向かって生きることが生きる意味である。それに加えて、他者から与え

られる生きる理由もあるのだと感じた。自分のために生きるのではなく、他者から求められて生きる。これは人が生きる上で大きな理由であると感じた。

- ・人に生きる勇気を与えるという意味で、隣人を自分のように愛すという御言葉を実践すべきと思った。

<CCCによるプログラムの礼拝>

- ・合唱や演劇など、どれもうまくてすごいと思った。また讚美歌もCCCの方が率先して歌っており、私もそのおかげで歌うことができた。私もCCCの方のような勇気のある人に成長したいです。
- ・日本と韓国の関係は悪化していますが、良い関係を作っていけるように頑張っていきましょう！
- ・信仰心を持つ大切さを改めて知った。



<クリスマス・コンサート>

- ・初めてキリスト教の、本場のクリス

あ と が き

2012年度は、大学礼拝が火曜日に一本化された年でした。毎週五百人の学生たちが礼拝に参加しました。聖歌隊が毎週賛美し、クリスマス・コンサートを開催し、学生たちが被災地ボランティア活動を継続するなど、感謝の一年でした。学生主体・参加型のクリス

トを経験しました。礼拝堂も普段とは何となく雰囲気も違ったり、讚美歌や室内楽団などの演奏もとても素敵でした。

- ・室内楽団の演奏と、吹奏楽団の演奏、聖歌隊の人や合唱団の歌に、感動でした。楽しかったです。

<高橋一先生による最終礼拝>

- ・16年間、お疲れ様でした。高橋先生が結ぶ実の一つとなれるよう、さらに励みたいと思います。ありがとうございました。
- ・学生として最後の礼拝でした。4年間ともに神様の恵みにあずかれたことを感謝いたします。

大学礼拝は、ある人にとっては長い間沈黙を守らなければならない忍耐と苦痛の時間だったかもしれません。またその忍耐ができなかった人たちの私語に対する苦情も多く寄せられています。しかし大学礼拝に出席することにより、自分や他者、生きること等について思いを新たに、信念・信仰を見つけた学生の皆さんも少なからずいたのではないのでしょうか。この大学礼拝で学んだことが、これから社会人になる皆さんにいつか役に立つと信じ、卒業生の皆さんへのはなむけの言葉としたいと思います。

ト教活動をこれからも志向していきたいと思えます。

キリスト教活動を長年にわたって支えてこられた高橋一先生と朴美愛先生が、今年度をもって退職されます。これまでのお働きに感謝しつつ、お二人の前途に神の祝福を祈ります。(編集子)

酪農学園大学キリスト教教育委員会

〒069-8501 北海道江別市文京台緑町582番地 黒澤記念講堂事務室

Tel. & Fax. 011-388-4775 (直通)